進路室だより

みろよ青い空白い雲

ご存知のとおり、明日、３年生は河合塾の全統マーク第１回の模擬試験を校内で受験します。するといるんだよなあ、湧いて出るというか、時節柄。決まってこんな奴が。

模試を受けて自分の中で勝手に大団円。忘れた頃に担任の先生から結果帳票を受け取って、にわかに騒ぎ始め、得点を見て、偏差値を見て、志望校の判定を見て、騒いで、うなだれて、自分の勉強の足りなさをなぜか自慢し合い、慰め合って終了。「ああ、お腹いっぱい」ってもんで、ぐしゃぐしゃのぽいだ。おめでたいことです。

そこで、どうやってそんなのお花畑状態から脱するか、そのような状況に陥らないためにはどうするか。今回と次回でちょっとその辺について書いてみたいと思います。

その１　模試は受けてからが本当のスタート

まずは自己採点をして得点まで出しておきます。そして解説を読んで間違えた設問を理解できるようにします。自分の弱点を理解して克服するのです。ここまでは普通。皆がやる。受験は多くの場合、絶対的なものではなく相対的な学力で合否が決まるので、ここで一味加える必要があります。

正解の問題をそのままにしないってことです。

例えば英語のセンター系ならば４択です。しかもふたつまでは比較的容易に絞り込めるのがよくあるパターン。実質的には２択問題みたいなもの。「えいやっ！」で運を無駄遣いすればたまたま合うこともことも少なくありません。ただ、必然か偶然かその違いは大きい。正解こそもう一度見直すべきです。理解できていての「○」だったのだろうかと。

その２　結果帳票を受け取ったら（その１）

手始めに自己採点との得点の差を確認します。実はなかなか合いません。御明算とはいかない。ある予備校の調査では、現役生のセンター試験の自己採点と実際の点の開きは平均で７パーセントにも達するそうです。７パーセントだぜ。７点じゃないよ。９００点満点だとしたら、１科目の平均点分はずれることになりますね。しかもその自己採点は「高めに」間違えていることが多いんだって。そんなことじゃあ、当然合格はおぼつかない。

次にあえて合格判定あたりに目を移してみましょう。結論から言えば合格判定なんてしばらくはどうでもいいのです。気にしない。参考にするのだとしたら３年生の１１月の下旬で十分です。夏休みの必死の勉強が得点できる力としてようやく定着するのが１０月だとして、そのころ受ける模試の結果帳票を受け取るのが１１月だからです。でも実際は現役の受験生は常に絶対的な勉強量が足りていない状態なので、受験直前まで学力は伸びます。水と海綿みたいなものです。だから判定なんて東スポの宇宙人系の見出しとか、初詣のおみくじよりもちょっとは信憑性が高いかな、程度で留めておくべきです。

でもさ、その判定も役に立つ時がある。意外に思うかもしれませんが、早い段階（３年生の９月ごろまでに受けた模試）でAやBの判定が出たら要注意です。それはその学校に行ってもあなたは少しも幸せになれないよって警告だからです。その進学先では、切磋琢磨はなく、オルレアンの乙女のように啓示も哲学的な示唆も受けることがなく、空虚で無気力で怠惰で「倦怠のうちに退学を夢む」だけの日々が待っているだけなのかも、と教えているのです。

さて、今回はここまで。

とりあえずまとめると、受験なんてさ、まっとうな努力を続けてさえいれば、クレージーキャッツの「だまって俺について来い」ではないけれど、

「ぜにのないやっつぁ　俺んとこへ来い　おれもないけど心配すんな　みろよ　青い空　白い雲　そのうちなんとかなるだろう」

程度にふわっと考えておく必要もあるのです。

ちなみに裏面にはみなさんがパンドラの箱を開けるきっかけになる鍵の一覧があります。是非！